紐育ペンシルヴァニア停車場に、
ふれて三十三丁目を西に、
街を北に、又折れて、
目を西にしんとと、
ゝ霧の所の中
を濠場に急く。
停車かゝる。
頃は四時の車すぎ、日本の
気候にはれば、上野は緑は
荒野撃ちから葉櫻
る。寒日の細雨夜おけ方
て、リバイドの接吻し
雨かんとする位で、北い色の
眠りから書を覚めて底知れ
時である。前夜位から降
つつけの霧花のあ
の様に降って降る。

甚至の自

。自働車はデンシャや、ラッパ
ワナ、停車場、博覧会所に、ハッタと
止まった。

人の来候が近つく。
取巻き人、戸を開くと、出て
来たのは、二十は四十前後。
中肉中背、口髭、長髪なる
男、人、ダーク中折帽を、
洋服の書生外套、ブルしの
ズボン、青の靴下、ゲンタ
ズボンの裾は、疑ナ無い実業
家である。顔色蒼白、元気
のない、病を見る
と、ほとんど、病人？を見る
者しと思はしめた。

三月二日

室内暗のまゝ紅葉の、空
船長家も戸外に出れば、
春の濃厚いと寒し、
空雲低く空に彷徨らし、
天候悪濁として日は隠れ、
三時半頃の高嶺とゝもに
暮れゝ〳〵ピルヂングは、
車の影を落とす。
凡すべて雲遠山に沈み
ぬ、降り積りの美しき
花の雨は、いとゞ寒かに
ふる日の午後を暮す。

日本婦人の洋服の着こなかへたなるかも知れぬ婦人の着物の方がまだは恰好がよい

男女人はとんなに大きな存認をしてもまだつぶすできぬ人生は三文の價値なし何さんが偉いとて死の日本の会社を辞しておから三日とまつの上に立つることかなりまた

譲渡

Buck を殺したのは校長が
[illegible]せられた場所
はその校の向に[illegible]
[illegible]を持ってゐる陰嚢のび
[illegible]玉を撫でたのみ
つゝある。

亜鉛の屋根
[illegible]の実は珍[illegible]
ゐた。撫の実を[illegible]
[illegible]ゐた。

野球の球が[illegible]つた愛
傷した校庭

[illegible]長に来て[illegible]

男子の為に苦労しあうん

ホードのトーイ、フォンを

出て出たら、母の世話

をしたん

古い自働車に乗って

出たん、両陣の前

に立ちん。

夕飯たべた屋敷外に出

ると暗くしいんん。

ピストーのジョウ又白描を

実きたんと言うん。其

生の下二階屋のを

600%

車に乗って出る

けつこん

林の中をくぐって出る

タンスの横の棚

○ コンプレイン

分ナレーション 濃霧 佐加故意

に本に釘をおすようなもの

三中、道に横四寸の

で車のゴムを破る。

と火のもえを壊す。

○ 氷をのせた三角

に乗せ、硝子

板をつ(氷屋)

んとて

○ 倍率の後

に氷を

教室の隅

れたら

なると数分後、濃霧は
晴れる。敵機は遠行
してしまわなかった。
これは十一二の頃、サイパン
。ここからビルの中は
自動車や俥隠者
二輪車等と喜ばれ
ずに、これは一寸
パトリを使へしたん
ですから。十二月
頃、
。いつも二三人に拘束されるそのあと
と基準を得ます。
。通信兵隊のもは雲
霧の中に雨量を見せ
ん。

○いくらかを誤解するにすぎない
ことは実へらの甚しきもの
なり

○人をの迂闊を笑はん。

○いくは落ち不滅の大光明を
授ける為なり。いくは
望の門を開きて之所なり。

○いくたるべき青年諸子の
双肩に繋かれり。

正座

○春光駘蕩、神樹の
若葉も正座は美しい。

人生の若葉の中に
嫌やみがせもの。

陰きつた生活は
生命の野
生命のよい野
多加、なんだ
(傍白)とした

横へ流れる。
手前に流れる川の方は
樹屋本の一ぱを白のポン
で繰り返えしながら流れて
ゐる。
ハンドルの柱を左に
横線を左に
ゐる。
二町ばかりの所の丘の上に
駐在所
の小屋が白い
に流れる線路の上。
右手、二番目に停車
右線の
んでゐる滿洲の家屋は
が、則ち コクレウドの兄。
へこりゝ。サルスベリの花
ひかる。
栗の実の角に日。花ミカン色

の絵の上手

彫りまれば警鳥風も嘆息を
めん花のかぐわしき世の中なり。
況んや痛彫の果に於ては
と。

これはプレスベタリアンの考
なりと云ひ居りし一束
持ち来りし小僧なりけり。
折しも主は客と談話
プレスビタリアン寺の教師
さんの路地に迷ひ出
小僧等の間にて称ひ
小行と云ふに新たにみちを
たずねる。
今考へるには田に一田又は
二田ゆかず歩行したとの

ちゃんの一家離散を
知つて以来、つきまとはれて
来た私の私姉さん。
昨日出の日曜の午十時半
花は言葉通ずるのみである
extent, guardian
神様の愛を信ずるとして
持ちましたる花を私の中
に注ぐものの如しなる花菜
彩すれば同情も友達の一
特徴と嫌厭と化する花。
死すれば死なれて生きる花
から出世の幕られるとは人
ことを。
Oct 25 レディオ！
母の子でみやつかへ君を弱く。

たとへ、金殿玉楼に住ひ、
御馬の糸毛車にのりあはれ、
香猫ゆゑ、到底さら
なしと、庶幾へりしなしえぬ
全身石隨とすゝ廣命
すゝまず心、散乱かしたる
屋中いとまれ、死ぬ
ぬ。
ぬ。

晴れ曇るひかりは雲のはやさに
日ぬ。
とまり日は夜明の空

寒底敷金

竜宮の踊通り、日の風え
ぬのも皆は雲のしわざなり
ゆと字良敷玉樣宣先
やうに、自己の心鏡を磨かな

かしすことなく読み耳あり
なかゆず会の音をせね
はなしの方。敬に感ずる
排斥しん宛主、感ず
るに計まるか、立十車を、
秋山お仕[illegible]ん遅ら来る
ホーテや其他に神ふと
言うた。

元年

寒さ年海に暮えかたく、寒さ、
はより寒く、暑さはより暑く
感じられね。そうして知らぬまに、
頭重く蒸し眠はかすみ耳は
疎く、一寸手一段足に重く
ようになる。凡なき殺ろ抜来
つせに其身の重さを支へ

かたと存じ寒身すると。
君は先生の未読に来ず
いへ何ぞや。

一家春田屋

・先生は市長就任
九天の雲晴れて、松茸は全快
致し申候。みなの日出か
すり私はますます
繁華の秋月は明
起を促す申候。まはまず
く信健にて
近ごろの中秋一
中心おんやすめ
ひはり
笹の穂の長き春日の西山に
おもひ知れぬ雲者かな。

夕ひばり

夕まぐれ小野細道わけゆけば
かすみの空にひばりなく春。

春たゝ日は淋しとしたかな
か

暮れゆく春の夕のこゝろをしと
なつかしと吟じ去れたり。

殊に白おちしおちぬの句が人
を感傷のきわに誘ひゆく。

たゝ、暮は近き空に忘れと
重など搖みちるふ野路

雲雀さへ我友とはなりて歌
こゝ花ちさまを探ら優美に鳴び
かなこれたり。口調なだらか
にて何しとしなし身心共に
地すらは如歌の如なるべし。
此べ見れば暗たるからたゞ味
たゝかんきを思ひ出せらるる。

（大海の底の深さしらずかな）

ヒマラヤの山の高さしらずかな

親のご恩に立てくらべばや

春は来たれり。

ことの朝け。霧のこほりとけそめぬ

ゆくえ知らず。

いつとなく永き夢とけそめの雨に

のどけき春の色は見えけり。

寒月。

土ぼしだに苦にはなれぬ人をなぜ

永き田舎の夜半の月影

ふけゆけば、苦に明るき人となる

永き頃の夜半の月かな

冬の夜は国の広さもしられけり

さゆる月に刺にしむ夜こそすれ。

寒月

月さえて松のこずゑにしづまりぬ
寒さを耐る光かな

影やどす池のさざなみとちかれて
氷のうへにすめる月かな

久方の雲井にさゆる月みれば
我身も氷る心地こそすれ

初雪

木のまより月ぞ出ぬる
雪さへつもる小野の山道

雪ふれば宿ぬしもおしなべて
我のみとなりにけるかな

自

青柳にとまりかねたる
淵名に澄む月のさびしさ

古歌　徳田輝典

○秋きぬと目にはさやかに見えねども
風の音にぞ驚かれぬる。

○もみぢ葉は黄ばみ錦と見しかども
時雨と共に降りにぞ来し。

○ものおもふ　秋に言ふれば
さびしさぞ　秋の雨かな。

○雲はみな掛けはなたる秋風を
松にさしこす月を見るかな。

○秋風にひとり少かぬ声をみ
せんる花の何れ有る。

日録　昭和三年一月一日至一月一日迄三十年
○年に先立ち年は若し
あまり隠りの命なりけり

直元

夢とのみ思ひなすべし世の中を
何いまさらに驚かすらん。

無題

世の中はいつわりかさて秋なれん
ゆき止まるを宿とさだもる

神代を見えぬ明鏡に松をと
見にまかすする月こそあれ

暁の鐘ぞ一のけれを打ち捨てら
うきし世の夢の法の枕に

春雨はさらでもうるほ人る
袖の露、秋ふかは元
見うもはふかけ一休

再生の恵み

今日生きて存ますは偏に皆様の御援助にて賜に候
（かゝる再生の恵は鉄心銘
肝に銘じ忘れがたき事に候）
この恵に比べれば一切の事
事ならず、苦海に陥らず、
事業に苦しむとは云へど
他感謝の涙を流しつゝ
足るを知る在所にて
止まるを知る故に苦ならず
功遂げて身退くは天の道なり

文政五年七

恩義を重んじ、命を軽んじ

死を恐れず、恥を知るは武士の神髄なり。

○生と死と二者渾然たり。

仏ちゃんは、生を捨てて死を主とす。基生ニテ滅の生なり。理解なり。

○晴れ曇る丸は雲のしわざにて、もともとは本明の空。

明治三十五年、

宗良親王、

雲はたへ月はたへて残りたる

松の住と高く見えけり。

親馬鹿ちゃんりん

子供は何れも周囲にとり同じこと、親が頼めば横の物を縦に縦にすらも嫌がるが、他人が頼まれば、犬の下駄を三足、傘を、釘をおつたり、定場に置たり、金物屋に使に行つたりして喜しがつてゐる。

親は何れの国も同じこと。

四

もしつ、サクリファイスとい、たアゝちゃん。子供には、夜の月も食べたがる。

麻布の子を養女にしつゝ

居。十二オになる子供の手を洗ふやうにそれを見せしやすゝ

ゐ。

それにつけ、親は世界の

かすたらまへでするといつた話をさせるから

と、感謝の一語さへいはず

いものを頂く。

十分の

母は十人の子を養ふ。子は一人の母を養ふことが出来ない。

と、誰やらが言ひやり。

身を捨て家を忘れる。

犬も吠え猫も引かれず。

猫の目のごとく、いとさびし。

千里の去れあることを言葉に改む。

嘗をう。

苦のを要く。

夢を地す。

金を捨う。

秋の月

すみのぼる月の光はかはれども
なほあさましき秋の月かな。
（なほあさましきこの秋の月）

春春の月

今はとて春を惜しみし散る花を
見せぬやうにも暗き夜の月。465

落花をおほしめしして
枝の陰を見せじとやうに
月夜の情趣深き
ぶし。

大空は花のにほひのこるかな
おぼろかたくも霞む月の影

青葉

かしなへに同じ青葉と成りにけり
かへでさくらの色わかぬまで。

468

寺

世の塵を裏とはなれて山寺は
人とたがく住ちぐみりけり。

黒塗のいろにそめゆく山寺の
ゆうやさびしき鏡のこころ

一枚の鏡

けかしまんとれぬと光るる山寺の
鏡のひびきをさびしみけり。

山寺

佐のこる松の古びに鶯きしきひ

女世はあれし心地こそすれ。

ウキウス女学プライヤー。レブル。訳れ出
時は明和七年九月老いなりき

新樹

一年を通し春は花に見まがへて
みどりもきそふ夏の山かな。

残雪

○ちりのこる花を鎧ひしや夏山の
青葉のかしれんうどいすのなく。

○草に散らし櫻はさきなく蕚は
花のにほひや元ちかめうん。

○ちりのこる花や蕚と(うづ)ひしは
さげる青草のあくになくらん。

ちりのこる花ちらぬ夏山の
青草のかくれに蕚のなく

473

雜　八月廿四日

子のうたづきに思ふことよべて。たゞ
痛すきは母上なり。泣きつゝ
こゝにおくられし。ちん重影の
み目に浮ひて、忘れんとするに
忘れず。母上しかで
おはしますうん。かへらぬことを
かへすがへすも。思ひつきけ思
ひて。涙わすれ難ち
や。涙薄の人。六月廿五日
しとなりぬし思ふのみ。同じ
国おなじ郡に住なれて、
里遠さかる山紬の。姓城は
なる親同胞。さえ厚て
親を九に見るもしなれ
ば。別離哀。

。わが心を先にあすに出まんず
らん。

舟中紅葉

舟うけし川頼こゞ戸は世の中の
夏を離れ心地こそすれ。

湖水の海に
ゆれ。

風とよど南わの浪に舟うけて
夏を忘るる夕くれの空

隣屋より折さしくれば夕風の
袖にかをりて涼しかりけり。

竹

雨風に伐わみかちはる老竹し
直きこころは元れもくりけり。

雨風に伏しなびけども緑竹の
折れぬ節をば人ともわなん。

雨中の萩

雨をじく向ひの国の萩の花
ちりぬるぬまにいそいでゆきたい。

雨をじく向ひの国の萩の花
まを見たまらやちりぬるまに。

燈

燈ともし
ちひさくにぶみゆる窓のとも火や
つひに我身を眠らせりけん。

平泉

たゆみなく眠の文をひらき
見る心を照らす泉の燈。

世をすてし人も住むらんかく
ひに見る情けとそ三びの
ものか。

○秋風にそよぐ木の葉の音さえも
ひとり寂しくゆく月を見るかな

自作

用度月　五〇四

とふ人もなき山かげに庵じめて
ひとり更けゆく月を見るかな。

おとづるる人なき庭のさびしさも
月みる度ごとに慰まけり。

ひとりしめつるぞさすがに秋庵を
今宵の月にとや人しがな

五〇六

山里にすむかひありてうれしとも
喜ぶ歌にすめる月を見るかな。

五〇六

女の歌のうし

定めなき浮世のちりはひとり見る
月の影にぞかくさりけり。

川霧

夏殿さす立河のあたり見わたせば
赤帽にかゝる秋の夕霧

五月八

朝日さす方すゝ霧の晴れもせず
たえ〳〵見ゆる都の山接

まだ見るゝ光の射ーすゝ

行く水の音はきこえて草ぼうけ
つゝきら落る利根の舟接

五月九

ゆくみづの高めがわかず霧こめて
こゑのみ下る空をよぶ舟

サラサラの川

旅

五月十日

見おろせど流れとも見えず故郷は
しらへく雲おこる立ちへたつらん。

花江著

二一五

○しかにしてかとは淋しけん山陰の
谷ふところの三軒もとらさで。

二一七

○山姫のさらにしきの影なれ
拙谷山にうつるもみじ葉

ハドソン河にうつるもみじ葉
サラナクラバル

田家秋

二一八

○秋ふかみおくての稲田かる頃は
賤が伏屋も豊けかりけり

琴

二一一

○月清し風さわやかな秋の庭は
琴のしらべも澄みわたる。
○君が代を祝ふ琴の琴の音
かすかにひびく軒の松風

琴

かきならす琴のきくべにさそはれて
夜すがら通ひ松風のこゑ

かなでする ピアノの音さそはれ
夜すがら通ふ松風の音

主張なしは遊き
年しキ者は捨る。
1932
Sept 5

二三年この方、生活難の凡
嘆ずべきもの、志業し
い人、凡ゆる方に散る枯葉の
如く、ちらほらと死んで
ゆく。心残しきこと甚だし。
さて今日の陣容に至る
ものは、種義と信仰と
心せめてものなぐさみ。
たとへば、華厳三日、高野山
階下の梵唱の如しである。
為すことすれば、家主から立
退を命ぜられる。ヘネシイと
京三十前後の男は、何の言
葉をもち合わせず、知らぬ顔、

夜半に、二時に眠り、二時に
ほどすれば何かを持ちて出
て行き、三時の色に帰る様
なことなり。静かにすれば陣
屋の人にも知れぬ様か、古い
戰利品の様な自動車にて出
かけるなれば騒がない。な
に言ふとて、目を輝く取り
する。すべての男共。
は、妖冥はペピガンを切る
パアレイと呼ぶ。我の
猫を銃殺したとしてわかつ
て居るところを事に見つけら
れたことである。成らは確か
に、パアレイに石を投げて居る
事を見つめた。猫は一弾丸
助命の為に止まることなるべ

日に〳〵厚せゝゆし。妹房
は酒を好み、おんしやし様
なること著し。
もうへイ、うバネッう。
人様の家に云わるのに、一言
の言葉も無し、戸もをハうう
ぜゞに、二階まで昇ることなり。
もうしん様を主人しのかとか、
言わる。
カーン。
亦
亦も書、他人の家へ無断
ルプラの外ふまず、もだか、
日光ランプを点ぜゝ居る秋山
の室の戸開けし見ゝ、主人、
ランプ中の様のか、また来
ゝとてもを行った。
友と京心様の女と

と言ふ。

からしふ人のみが、まゝ子のなる、

世の中を恨うてきた。さびしく

寂かな一生陣の人どもか

ち。

昭和一年九月十日

同じ（従兄弟）まゝ子は去れ行かふ和尚様

の表、藤真正一君。唐信

九月十日毎朝、

書記

俗人を通じ、ケさは、墓参の

為、桜ヶ丘ひとり去る。兄弟と

人は、オ一に陣地まに集りに

兄の墓を掃除をし、兄

は代つて先祖の墓前に禮拝

住職、兄まゝ後、宝林寺に

墓参仕度

（額づく）

金ナシ

（八月十七）

落葉

○ちりぬれば古井の水はうづもれぬ
木の葉の底とぞなりにけるかな

○吹くかぜと聞けば木の葉の吹く風の
窓の底たいく言にぞ
なりけり。

○晴れぬと聞けば木の葉の風なきに
散るぞ小屋さびしと言かな。

五三六

自作

○大空は吹くかぜつくして神無月
木葉の雨の降るあ日となりぬ。

○朝霧のはるかしたの里なれば木の葉の
錦にうつむ二度のかすみ流

ちぶれ

○筑紫をさすらひて庭たつはしのつ
ゆくてにすさぶ玉敷かな。

十日初旬

○いとどびが庭の虫に言はんと
夢のかよひかすかな。

（初ずれかな）

○雨ふきぬ秋の松ぬれおもたし
ちぶれつゝ夜は寒くなりけり

歌

○くれゆきて春かへりこん年なりと
思へども春は待まるゝかな

集に載せ

空翔る鳥にも増して猛はやし
かまくら車のいきおひかな。

汽車

ふきなびく煙を空にたなびかせ
車のおけは見えずなりけり。

見る中に車は遠くなりにけり
たゞ一すぢの烟のこして。

小雨

しかはかり降ぬるうへあにには
降りいづる雨の恨めしきかな。

ふりはへてとひつる人のなごりゝを
かへりしあとに雨の主ゆすらん。

あすすぎと止めしものを君は今
野路のわたりをぬれゆくらん。

五月三日

○ひとしぬれは降りまぬ夜ほまん
陰すみちにかゝりさらん。

ありあけ　三六二

○横雲の空にきえゆく有明を
とゝろほそしはがつるあな

○志のゝめの明けゆく空の秋風に
靡くはなはた霧そこぼるる

○志のゝめの明けゆく空の秋風に　自作
靡くはなはた霧そこぼるる。

秋雨

○友どちの飯らさりせばかしまりに
今ふる雨をさびしからめ

○かたりあかす友は明りし秋の夜の
ふけゆくまゝに村雨ふる。

明治天皇の御製を謹寫す

四九

○目に見えぬ神の心に通ふとは
人の心の誠なりけり

六〇

○うち向ふ鏡に心を磨けとて
鏡は神の造りそなへん

一二二

○五百行く人にはましを惜しみて
つゆきの道を復みなたがへそ

一二四

○すきみどり登みわたる天空の
廣きを見よ人とりがな

一二六

○さし昇る朝日のごとさわやかに
持ちたまふべしとは思ひけり

明治天皇

死後室

室を敷て四四

○晴れ曇るなりは雲のしわざにて
しとすり風は友組の室

一四四

○雨ちぬ雨ちぬとかあよ玉つ神
民は吾子の生みしるければ

二七八

○宮神に注かすものは世の中の
人のこころの体なりけり

三四四

○新王の年の終りて ちかつきぬ
暮し寒しといひ暮すまに

三五一

○雪は先へ消ゆ先へし後にこそ
松の信に寄と見えすれ

○所だけにしぼみし梅の花見て

蕭きわぎとて思ひすてゝ

姉尾義郎の歌

五七、

○霜枯れと見しと鹿の鏡をえて

強にかゝる庭の老木

九條道房　六七

○咲く梅の枝を見て思ひいづる

庭なる枝のかれし光景を

○ふるれども枯つゝしの道さの

やがて花咲く春は来なん

○人さのみ頂しくしとか思ひ

山岸にほらあ頂し字かな

時尾氏

○花散れば春まのひろごる目をあげよ
秋の天地に悲しみはあり

○祈りとも傷ましこを嫌なれば
祈る心に詩なければ

○暮し高しの時る鏡の影を仰げば
よろこび見れば我が姿なり

二六三

○どうせ
どうせ苟らべき花よ
月に凡情の者を誘せ

○鬱蒼の大樹の人となれば
朝日に身を山樹花
つゆなと注きし孔の不たれたる
奉ずれば悲しの人の海に

(萬朝)

姉の庭はせまけれど
○菫紅梅の庭の都はせまけれど
人をまねん
廣き世に立つもとひとり行く
身近山に　元政上人
○何故に帰きし君の去りてと
思へば袖に玉ぞ散りける。

三七七

○帰きねば　まだ明らかと待ち
立ちゆく袖に雫ぞかしける

完

竹馬の友　1932 八月十八

たりうまの頃より今に忘れず
変らぬ友は思ひとなる

親の恩　1932 九月七日

ヒマラヤの山の広かさも高さも
親のごおんに立てくらぶれば。

稚園

幼年時代

髮子

額髮

うなゐは芝生にうちつれて
散り来る花の形をまもりかな

○二葉をたのしみありけれさまざまに
あひさき見ゆる大和撫子

○ゆきき花田をたすのをさたづ
つどひて手わざ多き代すな

○いざや見ん　いまうたへ　百代の
千代と千代とつきぬ末を

古歌

○みどりなる一つ葉とぞ春はよし
花はいろいろの花にをすけり。

五七二

○をしへとさ一つみなぶとづくうなゐがい
つそぶ園生の賑はきかな

自作

○まゝき花年のさら年を待て
いつれ如花の咲きまさらん

○雨けゆく庭代のめぐみ今の是にすひつゝ
いましあひるる園の春雨

○五七もすん迴らぬる等れ打つゝひ
とのまはびせるる庭ゆかしき

○うちつゝひをしへの庭に君が代を
先立ちしいうたふさきなど

雄星人

○けぶるまたうきよのちりを払はせて
春ふるもうれし夏のは雨

○君たゝく滝のおときく山かげに
夏をわすれすゝしつるかな

辭

夏

○夏なれば山下かげの草もしろ
きとしの夏しと言ひちらかな

○秋夜のたへぬあつさを避けんとて
人ゐみまちまち利根の川つら

○をりくは衣あさわと伊香保山
夏をまさにまこしつるかな

○たへがたき都のあつさまさにこと
ヒナ
前に住む身と涼しかりけり

○さきに居る秋をみ居し仙六に
へ行くとか霧と星かな

○都にわかし　あきの　ゆふぐれ
　　松のとぼそ　ふく　塩　なるの　月
　　九八六

○たへかねて　夏のうみべ　ゆくとよそに
　　ふみを　あなたの　みれば　月

月

まつの　うら　八

○さびしい　はなれ　寺の　松の　上
　　月　月　ひとり　座を　のこしけり。

　　九八九

○大空に　かゝる　月を　限り　なき
　　君が　一千代の　形　なりけん

○たらかも　かゞやく　月を　久方の
　　天の　かはらの　男　神　なるらん

○月の　鏡　なる　中　なりと　見えわかず

八月星　三九一

○さまざまに月は入りにし大空に
ひとり冴やけき星の光かな。

○このゆふべふりつづきたる雨やみて
雲ひとつ星のかげす見えけり

○さみだれのすぎ去りぬれば雨の雲ひとつより
見そめる星のめづらしきかな。

三九二

○長雨のこゝろにかゝる雲ひとつより
星のひかりを見るぞうれしき

○ひとりゆゝしゆふべの庭にうれしさは
木陰のほしのひかりなりけり。

○多くの高き塔ある宮にいで
やどりそめたる星のかげかな。

○なる一神のあとはしづまれる雲の面
きらめく空をみながらゆくゆくはかなし。

五九八

○雲は流れ山は崩ちぬる大空に
いとゞさやけくのこる空をみず

在歌　有明

○横雲の空に消えゆく有明を
心ばそくしたかめるかな。

○赤のゝめの明けゆく空の秋風に
靡くしなばし靡くこほるる

自作

○つねにきく多摩ホールの鐘の音
ものはかにひゞく秋のきにけり。

三三七

○青々ひげ

○末遠き若葉の世をもうちなびく
雲雀なく野の春のたのしさ

夏の夜　三五

○夏のいねまぎらし夏の夜は
はかなく更のおどろきぬ　三五

蛙の声

○きりぎすは是もさずかに
小田の蛙のくぐもる声

蛙　578

○大かたの望はとげしや沖かぜに
るのおひさまを見るを楽しみ

○小屋に世をすごす年は豊年を
税ふ人をだにたのしかりけり

578

部屋
杖を相手に寂しいものは
互違に寄まかりつ
けんとかくやと想ひやられて
き鳴くなり。

D
豊年を祝ふ祭の踊の上に
吹し油たけきく小田の秋風

大元のみちは高く秋風の
はるの空まで行きてわたれる

ちゝ日を書見くらしてゆふの
涼しき野辺に月を見るかな

中秋の月を面白く見ようと
花芒をもとめ月出しし月出でしかけし、
軒先に見えた。

大和月、602

うちなびく木の葉の影に星かゞやく
露のやどりの秋のよの月

601

世の中のあこがるゝ君さまとて
露のつゆ〳〵月を見る哉

花の上に月うちかすむ夜なゝを
みよみよみよみよ秋たのしき

映画

○すこやかにうちもまろべるはるかなる
ひとつ沖まの立ち一つの時

602

○天下国を国をまろべて
見しらしめさばしかにうれしき

感想

○一度を説かんには時を待てし
○支那人を説かんには武を待て
○日本人を説かんには義を待て
○この所以を知らざるべからず
日本人は武を待てどんとまろ
は東洋人の行動を解せざる
との甚しきものなり

自伝

○鳴きまわる虫のごとく常なる
哀れにひやしく杜の夕暮

高原にて　今

○炭竹を吹きしなびかせる木枯の
音やかなしき秋の夕暮

今

○あのかじじ木々の梢を色まして
時雨と共に散る紅葉かな。

今

○くさ〻ぐさに移りゆきたる世の言も
寒さを告ぐる秋の夕暮

九月末

○秋の気方は、空のけしき変歌
まつた、をりく時雨うちし、紅
葉多くつゞく静かえめはど、よ
うづもの村ぐーさに、じじひ
ろ田と共ぬ、別れの近づほ
と、えどろに悲しく、秋つ言

去のねにつけて君がたきこと
すん弱（おぼ）めしけり。……野原
ゆにも夕霧の立ちみちたれ
ばいとどあぢきなく心細
うて去りがたいふだんの通りなれど。

時雨

。道のべに憂へ顔なる柿かげ
見はしれこそうれしかりけれ

。うすかねの土さいさごる夏の日に
寂しさ忘（わす）るる夕立の雨。

。夜のみなか住（すま）ひ 607

。御寺なる女にみせばや夏の
ひかりにとめる廊のすまひを、

今日は彼岸過ぎ わらは真柴をる
藪かかめとかたりくれた

とひきませ月に任せ草に書かへぬ
かた山里のかんた住ひを

わかせこか 縄なえふ家す庭にに
衣うつ声もたうしかりけり

雨しきし日し出でぬ鈴鐘は
そこにおきまも秋を法ん

垣根さへ外かおらぬすすひを
心やすけゆき山田の庵かは

かんかの木立なる月にさわれとし
さわる事なく秋すすひかな

秋之

○はぎさかりにきゝすごしぬ。

○ここかしこと同じきゝにはまきゝ博士はなりけり。

○葛城山はなりけんを。屋敷はとはまきたゝ後にぞつけつらん。

○後の世なほ庵あきらかたるものゝいひたるなり。

○人を知らずすりぬるとをちゝ惜けれ。

○寺もしるこれらかまきかとましかし。

○いはせたゝにしけれ。

○伊勢物語雲はかゝずゝ

○山をのこりなく見ゆらんたり

○畳を敷きたるトへたるやう

に手ふかんゝそのまゝ、の事

なでもすくわれる。

北のかたは雪に埋もれはてしと木は霞にまがひて日も及ばず

いとしへの深き心を忘れずは見るかひ乃ふじ天のかぐやま

きゝなれし夕うつ・ホールの鐘のおとぶとしと高れにひゞし秋の夜

さゝなみし時を知らする鐘の音も寒さう高れひゞく秋の夜

東京帝大先生 1922年5月4日一〇

初夏の会 初夏の日の暮れ方なれば

玉も黄色に何か物悲しき

玉鏡の影うつれば春の山

春の山のしたもとうれしさ

。けふ私は親鸞聖人を偲ぶと
きとて和讃たつみ思ひたのみ
夫唯中心に親鸞しぬ
「時時念仏を称ふる歌」として
ありけん。

師恩　　古礼田信

。教導の道ふみそめあるうれしさと
学びの親のめぐみなりけり。

。撫でるもぬれし色こそすさりけり
あしへの親の露のめぐみに

。色の道ふみそめて師のうたの
ふかきめぐみを今ぞ知りぬる

道の親の志をしたくはいきし世の
潮の一重に感にたえず。

友誼

○世の中に持つべきものは黄金より
心を知れる友にぞ有りける。

○月影に一夜さまかる友まちて
憂きことを忘れかたけれ。

○流れ流れ行く世なれど
深き情は頼しきかな。

自作

○人の世の道ふみをめて先まよ
ふるさと昔ふみを今ぞ知れる。

雜

○おしみまる友まちこと恨世の中の
黄金にすぎぬ宝なりけれ。

讀書　三六

○流るゝに任せの書は讀書も
知らぬ事の中陰ふかしまし

○遠つ世もしたしへびとも見ゆるかな
書讀む夜まのとしびのもと。

○書の海に富む信濃の国と聞く
たわゝに滝まず讀めよひとゝ

○つらゝをつきくの落る音の
聖の筆きし文の陰山に

野燒

○あたまる野末のかゞり影きえて
あく霜白し夜ゝふかゝけぬらん

○ものくふの声しと社のいかりかん
雁さえくしと夜ぞふけにけり。

○竹の三日月玉の簾の内夢ぞ結ぶ
布屋を眠ふす秋の夜の月

641

○篝火の煙も消えしまぼろしの
かすかに残る篝火の影。

（意味中に）

○かためをうまずゝ武夫の影見えて
かぶり大あるし天幕のうち

○ものくふの宿る荒野の月ふけて
剣にあすふ露ぞさえけり

獄舎の夏

○さきくさの色ぞ白しいとさの糸えば
しるしの花に秋風ぞ吹く

○かたりつぎいひつぎゆかん国のための
命を捨てし丸太ほまれを

いさを

○国のため立てし功は朽ちねども
歌と俳句にしるしをぞ残す

○秋の月

○すみのぼる月の光ぞ冴ゆるなる
なかめさびしき心の秋の月

○今はとて朽ち名残りに散る木の葉
見るも哀れ滝の月

鄙すまひ

○ちからすにめ丁用の稲につとひきて
ありこの立ゆる秋ぞ深しほ。

○住みゆく代なれば
住すまひと楽しかりけれ。

○住みなれてじまて安しとは思ふかな
めぐみの露の厚き恵、

○是仏のうきふしも
知らぬ假庵に
心やすく引て眠るかな

○山用ゆる庵は朝夕なとしの
産もきとえとおもしろきかな

郷愁

○天さかる郷にすむ子等の秋の
なつかしさつきぬ花かなしも

老人

○月花の友にはあまたあれども
かひなき世代にあまたのしまし

○惜しげなく命と言ひながら
命のすがた惜しかりけり

○なみに世にはかれとも何ひとつ
あるひまもなく老にけるかな。

○塵埃世にけがれぬ我が髪の
霜と見るまで老にけるかな。

○世の中にうとくなりゆく老の身と
言葉もなき庭裏なりけり。

○ふりつもるかしらの雪のふるとして
花さく時ぞ枝なみかな

○老の身の心はなりぬれども
太刀うちとれば老ぬしなりけり。

○老さ北は大(強)木(樹)のみとみて竹葉の
なびしかたうるはしかりけり。

○中々にうきに苦北つゝ世の中の
苦しきまでは老ぬけるかな

老人

何事のまかしかたりをはじめるか
孫にあたるほどの少年

とる年と共にわすれゆくさを
淋しく思ふ子こころ安かれ。

なぐさめ慰むれば
この大ぢんへ行くけり。

肩の霜かしらの無るわれなから
あとどのかぎりまで老にけるかな。

いつこをさまて見ゆる老が身に
ふる年海はさちかへるらん

奥州の杖を千歳の友とも
つまづく老の坂を越ゆらん。

三月二日の草

山をゆく人動かぬものと思ひしは
市川のしたを知らぬ者なりけり

ひかりわたる秋の日の光りは
いつの世にかは書の見ゆべき

六月五日

いくたびか雷もしらぬ大王の
時代はまろびつよ時代なる代

万歳の行き皇御門のひかりを
月日と共に世を祈るらん

。三ちさき車の俥九さ、すりし
きくしうれしきまの年の声

。つすあうちに車きわたるみしさの
ひしきる今はまの代の声

。声えにかちどきしうけつ皇国の
ちるづま祝ふ今日にしつすかな

。つすま一日の光とりにまの代も
いよ、栄えん幕なの国

二月三

。元の代なつきにと思ふ方地の
つすん限りと契りむすび、

。幸せ木し苦にはびきく歌ふ
わかるつもの、まの代の声

Sept 15-1932

Mr. S. Midzutani
Japanese Times
12 W. 17th St N. Y. C.

Please do not worry. It will be good for all of us. Let us carry our own plan.

Expect to remain three a few more days. Please accept our heartfelt thank for what you all have done.

Gyuro Fujiwara

Tsumoumura

三三

○うなみの たちし所なに ひきかへて
ひぐらしうれし 蛙の声

蛙の声

○蛙世と三とせ四とせの 幼子が
声しきすしく 祝ふ代こそは

〃 大和田

○竹のうへに月しの居りぬ 世の中つ
富も位も 土産すれば にて

藤井巧

○うぐひすの 鳴を やしまの山に 見
と
鞠のあと もし 吉をぞ あもふ

〃 三世

○山を人 ふきしれ 小ふえの 小夕声を
猫すやしまの山の 桜 鳥

。事変の秋は今年の秋にあらず
。春は梅の香より桜の花へと流れの
風ひとすじを清らかに保ち。

1932年春十六日ニューヨークタイムスの社説を読んで言葉す。

。九月十日、日本時代は、支那政
出を放って先ずした満州
獨立国を承認するたのは
第二声明にて言
明白にして、其日
間もなく着手進行した。
。満州国政府の組織
厳粛なる無言と
共に花の時に於て
旬から締結された。

初めも偽

其條約には、左の如き文句が有る

言葉にて、夜半同盟の

一句が挿入されあること

を発見した。

これは、新しい日本国の宣言書に

如何なる形式に於て有りしか

疑問となる如きことなれば、

満州国は独立国なりと云事

を正式にしかも厳かに約束

したのである。

かうした條約文を見る度に

来人の歌にピンと浮ぶのは、

昔は、米国政府が八十年前

に結ばれた條約を締

結したことである。その條約は

新しい米国が正常の意

志に陽炎として接触を要求

こと等は八十五年
なる陸奥乃ひ甚敵所は
我つの自由なる虜論に
仕すと云ふことを請合つた
云ふ。
○昨の満州乃の首府に軍
隊さへ見受
ず一般的に
的法眼を有
する人物の事
なり。
○日露の代辯者
紹介者
露国公使を訪
問せる際
二人共
二人共
別にうつ
呼ばれた
行しまつのこと
なり。
○本月七日の事
なる自衛の
満州野に

ひたすらとなれば、
戰つたとせんか。まうしたたかば、
日本は何しろアメリカ・イギリスの不戦
條約に違犯することは成し
ずはみ長い。
張したと。
それ丈すす、滿州國創立を
見體化せしめたるものは則
ち吉田の民族自決主義と
なることと立化しつゝ。
但し日本、如何なる重實に
なみを
又みを直ぶして東亞協
家の基礎を基礎を基礎
現ぜんきものは僅之少之
ものでする。
仁俗、日本は
右口政治に向つて考慮せも
べく事實の
於を操作し
たくもする。

誠に恵まれざりしことを有る。

システムと云ふ移行と云へども

満州国の承認を躊躇する事なく

ずるずると行ひ日本がかうした

点に慇懃に従属させられ

とは言ひながら

以降右傾日政府となったはが

ら同問題は言ふまでもなく

幾年かなる日を経ても

ず。在所に沈極的

一種の挑戦的態度を

ら言日政府とは

ここに事実が、既成

事実の如きを。

1932年12月15日

視すること

春雨。ピヤノ。きこゆ。

○かすかなるピアノの音や絶へ絶へ

なれど深くへる庭の松風

○昨日まで眺めし庭も今朝は

霧はれぬこの四月

夕くれ

○夕まぐれ海岸あたりを三さかす

人の影忘れ世にほまれかな

ゴンフア

○雲晴れし頃より紅葉ちるまも

鈴に玉章はもり人ぞたのしき

痛快

○玉章をかきまぜて嬉しさ絶

とみて信し乃ちくらたり

古歌

○古畑のそばの木立にねる鳩の
友まつ声のすごき夕暮

風雅集より

○空はれて木ずえ色こき月のもの
凡に驚く蟬の一声

玄賓、僧

○とつはれて三年清みとぢぬ
一部のうちはすまるまされり

○ながけ絵へうば玉の夜
○窓にさし入る月のことわぶそう
○みの蟬ちかくのこれるなほ木
の蔭にすむらくもだし
○すでにあつれは黄なる鼠の人

なれば

○まことに夢か幻か夢か幻か

いまゆめさめしやうつつしら

ず荘周にあらず故郷のことは

まぼろしとやすらけん。おもへ

○折にふれて雲は凡上の様をいとなみ。

霧は八重の山を隔てつる。

かけはし空にわたしなどつまし

興どもは。誰方にするわざにか。

○ところを歌にあらずとおもふ。

べし。

○なほ三国志べし。

ゴルフ人

つゆの芝野をあみわけて

○なほ芝野をあみ野を

月

エリを取はしに入れるあは

スコアを合わせるタイム

。日のあたり屋かでるまで言野にし
玉を左右にして出る人かな。

狂歌　ゴルフ

コブルファー

。六尺五寸に口ばかりかゴルフ行く
大コル鍛冶もみなゴルファー
涙とネブリフク

。そうら見ろまたしまった頭のバンカ
六つ左右に涙だすかな。

狂歌

。やけあとしゆとみれば玉も無
狂歌弱じる梅の外ゴルフ。

。ペテコート芽張りかなしてしれ
四人を信ずる

頂とに四人キーサム注ゾをみるぞよ

自注

○ここが分だ、ブランイ[illegible]ゆきも
パーでゆくまで オヤ。ルスライスか、

疲れとやけり

○けゆは又玉はあたらず気はとさり。
やけと疲れは増はあかうけり。

此後

○玉池を越して向ふの傷まとと
少しとやけばまた九百
奥様に気九の毒

○気はそう玉はあたらずにあるのは
家に帰りて奥さまにのみ

笑止千万

○且那さん帰りてをきかぬのは
ゴルフにまけと驕傲だは。

孤城落日

○日はくれて梅の実ふみ玉さかす
人の心ぞ何はかりけり

再度カ

。こゝを見まもるウレトアナバプルしで

子も左せしがアラトバランド。

定まらぬ脚

。プラレイがうまくあたればパーでゆく

叩て見れば又スライスだ。

ゴルフ人

。星を見て我五五だしゴルフ人

まけて帰りの路を拾ひ長

つ

。朝めまみ清えてから出て日にむかへ

一生懸命ゴルフ人すす

コルフ人

。空は晴れ紅葉色まさり秋の野に

白玉ちらちらゴルフびとかな

稽古

。左手を折る毎曲げる毎直しても

スラインがするから上手なりけれ

俳壇

○それを生が左に書きてはわかへり

グリーンの男ちと書つゝかける

パー

○誰に見せ誰に分たんこのスコア

九十ゆくの加と

かし　森藤井言る

○あかしきし朝戸ひらけ春かすみ

○君さいなしからぬをかし。

○美しうぞみゆらんかし。

○男もまぢかなぞかし。大和田

○さそうしうはしるかけんかし。

○春ふかし男ぶるかし。

○実に心ちも男なまかし

○みじうこそ雨けれ　さた八

蕪　ゝろこしたゝ春きく第つけたりしか

まだ春のうら書の世をくい

なりけれ　なをけれ

夢村さんへ

拝啓　暑さ　九月三十八日

緑しげる夏のおひたは、朝、
夕、樹の根に色たて、世の風
にしたがす轟ずる力量に
まで踊まれたる立春盤木
は、枯れ葉の散るに伴ひて
葉後の訓爽として現はれて
来る。

襄後の空を去るのは九月三日、
晴朗なる土曜の午前でありた。
余の郡主サボトリヤに移つたの
は九月三十日、二度は晴れ、
秋凡訓爽たる月曜の朝
であつた、一は曇れと雨に
天気がちりので涼しい方な

かゝた。二十七日、雨ふり強
け二十八日の午前は晴れたるも晴れ
た。荊妻は二セスクラの花
待ち出でし帯を結ぶ
二十八日午后二時半
年住馴れし三十四番地
の宅を出でたりし去る。

三行不一段

講釈の上手な人の主張ばかり
聞かんと思へば九かた
なぎ居た。

クラブとは「友達」の集まり
横浜のは天上、二重
つゝ年かゝ
叩く時親の仇を伐つ
顔なくなる人
あり。

たちまち達人

新聞の通信さげたるゴルフ人

かちうちしたる頭上なれば

〃

義元と叩く越ちゃ八シカをば

玉をつかみし越すなもすら。

高山七郎叩くらあがりーンは

ナンと思つた玉をあすなら

感想

子供の時は日は長く夜は

短くいまこそ夜のあらしるも

あつたかと年老いるとなかへ

日はますます短くなり夜

はますます長くなる。

テーブルたち手うつときは周囲の者
皆と共に自らなる所なり。

米国民のかす

。米国は世界のメルテングポット
である。ここは多国の時
から一耳にする。まゝ見れば
成程さまゝな人種がある。
金髪碧眼、肌白き美人を
始めとして、すげゝとしたしの
ずんぐり、アフリカに見る黒人も
ある。東洋人、痩せみすぼら
西洋人もある。一方黒人から
白人もいる。黒人の顔
黒顔色の黒ずんだ如く
黒人の顔に黒ずんだ色

これまでの人種が中我とする
金に少なくて、キリスト教
とする軸によりて統一さ
れ、浄化されつつあるが
如くなれども、なほ軸
にそかすいまだ明かならず
中には、面のものと陸のも
とを見解のつかぬ賤の男
賤のあるべき、男と女
とを見解のつかぬあり様
動となし。
これまでの人生の頭脳は哀
れへすぎると低劣である備
地を、道徳とかの観念
は乏しく、自己主義
利慾一点化する

青葉会

1932 十月三

うすれし陽は雲海をし

○青葉会つどひ初めしはワンコウの
青葉ひろごり鳥うたふときい

○ワンコウの世のゐしろに四度しと
かたるつきぬゴルフ話しを

○雨の日は傘をさしたり持たしたり
腰に手ぬぐひさげるもよろし

○からからと人生青葉を
傾ける酒盛会と呼ぶもおかしき。

○麓の主宰のもとに集らしは
小村氏 徳本と内田氏

○からだすう高きゝクラブを横ぶり
ウントはぐるかゝ田主式なり。

○あとはしく玉をたゝくから情式
けかもはれば距離に意せず

○玉あたりすごく飛ばすれば松郎氏
未だのしレキゴルフ人なり

○まるで玉はうしはゆる飽きは
注くはかれず歌ゝ舞氏

○伊井氏うまくはれば自慢する
まだ たたけば空をゝるかな。

九月の記

○九月三日午後、麗川家を去る

○九月七日ドラキレンが東京を去る

○九月十日 郵便の義八掛

蹄の書を送る

○九月十三日 私宛の電報

○九月十四日 私宛の書留

○九月十五日 国田氏より書留

○九月二十日 帝国氏より書留

ピアノ調律

○九月二十日 ミスマラン来る

○九月二十一日 午前、久々来訪

○九月二十三日 余宅を去る

○九月二十七日 パーレイ来訪

○九月二十八日 パーレイ来訪

○九月二十九日 ドイツ人来訪

○九月三十日 ドイツ人来訪

31
15
16
65
65
65
65
65
65
65
50
76
48
29
2971

二十九日 ドイツ人来訪

二十九日 ドイツ人来訪

。垣の卯花のおれと咲きこぼれたるも、人待ちがほなり。

。堤の花のたゞ雲とのみ見えつるは、きのふ雪のやうなれどこの頃瑞枝さしおほひたるも、いかにをかしからむと、例うゑ廣のやとりさぶらふ。岸の藤はうつろひぬる。

。櫻、机の板どもに薄く濃く散りまがひわたしたる、木陰のこゝろ涼しゆすず。

。ゝゝぬと、もの見えたり。

。青海波に幸西にかすりをいわとわやさへ思ひ知られて、夢ものこゝちすると

。河見さと泣きて、西ほろくとこぼれいでぬ。

書の書き方

年にすれば九年九ヶ月、日にすれば三九七六日で有る。実に長い〳〵百、夫を助けんとして屠蘇に酒をしみ、寝食を忘れたりとは幾百日の有ることであらうか。寝ようとしても度々目覚めし、食事の完全か、完全の一角の、カフドにゴロをする者。食事とえば夫には塩を食おうとうへ、子供には グロイン、ボーイだから滋養物が必要だとして、妻庭を掃つてみるか、自分には、残飯、飲残菜で生を保つて来たのである。書、筆、硯、

の廊下を通るにも、自分の室
からなるので先便所か、厠の中
にて、すると云う夜様。
デリンクと、時をかまはず
呼鈴かなれば、寝巻のまま
で、或時は、事務員が来れば
、隣室の夫を看護する
のである。別して其二階
者の室は、窓を開放とする
と、窓中には、幸ひの如く
便器の中のまで丸抜
る窓さである。自殺窓
外は廊下三十五尺あるのと
し廣さである。又自殺は
樹木は凝結した度は砕ける
する。屋板はりりる〜へら。オラ
て窓が砕ける。然る甲の

鉄砲を撃ちかけ、それ等の者の
叫ぶカン〳〵ビン〳〵バン〳〵
静寂を破る銃声きこえは、切
なきことを例へん術もなし。
かゝる夜は、書は記すこと、寝
室用ち、室を暗め、湯タンポ
の湯をかへ、余ほどの勝手室
気を入れたりとも病室をあ
たゝめなどしてみるまた事の
思ひなることの虫をあれ。

下痢や

○家族皆集まりて、ちゝのも母の
食事は床の上でするのも、その
曙を下ゲしまうと大概
十時に成る。まはをれ
かゝ床を出て直し、中室

先ずは二階から下りるのが
十時すぎ、たった。
炸薬は コトン（と
流れる。言わずもがな、消えてしまい
みれば八オ半の母の
手プロを二つに折って首を
かけ、シュクの前に置きこん
を置き、其横に立つて
見ひしておるだけ。
すると父は其をば行きし
去へきりく
まくらむ
する。これかすあば、二宮銘
葉の方をさしたり、拝跪
の手付をしてマダレットを
助けるのが会員の仕事
ひきた。

杖球愛者

1932 十月九日

月落烏鳴滿霜天
紐育城外兵乱来
杖球逃民対殘燈
東雲雞鳴猛點呼

杖球愛者

兵乱慶

親の泉

離れれば離れるほど
慶びは高まる
愛と敬の男とは

父母の恩

。孝にはじまり孝に終する事の今ぞ知る

尊き育ての親のご恩を

先生の恩

。離れゆく雁のほどに見ゆ

面影の喜寿と坊の恩

金風颯爽秋高日、紅葉深遠景

無言流猿啼三川

落葉紅々淋班枯

時見寄る鶴南房也

十月十五日の朝

。一番のテイうちもと三人は

霜降りみて朝日見るかな

十月中旬

○霜ふるさゝ芝野ふみゆくゴルフ人
ふりかへり見る夜明の月

三日下旬

○凡さむき雪花な野にゴルフ人
旗を見かゆて白き玉ひろう。

未田人

○未田人は晩でする仕事は坊
ぢまる、指でする仕事はか
ら姑目下。

雪子

○頭を下ひらゆるは下げ。上
ぢへき時には上げ。まる振
るべき時右には、死を顧みず
敵をも振るべきつもり

一月

古畑のそばの木立に玉ぼうき
昔に驚く蟬の一声

十月

空晴れ木つる色とき秋の夕
玉ぼうきひびく池の波に

木葉重晩霜稍既降
明月高天稀見
離巢之声立寂

まとの外見たびとに木の葉ちり
あはれ弁に沈む秋の海棠

アリネス

初めて学校でアポート借りて生
徒としてみる喜びは、嬉しかこと
に集つしい事を期待する

みたら。何人か戸の鈴が鳴れば
喜び言ふと、戸を開けたのが、
十二年後の今日は、人の姿なし
が耳にて戸を叩と云ふ
怪(戸を開けようと
なった。と云ふのは、こんな風に
しようを見られるのが嫌
だと云ふ。御殿所が下の屋敷
が神助屋の隣にまたのは
なるまいか。様子の相違を
懸念しつつ恐怖する
ばかりなり。
すまひを
使ひこと変化と云ふ身が使
やすと来国みな同じなり。

さびなみに深ふかけ吉れ有り

備に為かたる人も為けんば

如西に逢つた上、

しばし花に皆に有れ

頑れに深ふ月をかなしき。

十月初旬

○ちら散かと風に散る紅葉は

秋をかなしむ頃と知れ。

○ちら散かと本の葉の散るは

秋をかなしむ頃と知れ。

○立ち寄ることは、丁

度生人形の如つて花の色

見ておるやうな感じがする。

昨日の切日は

しきりに淋し

い感莫大なることは、恰も

生人形の踊の七月の様に
もうんでいんね。文は
達人の言はれることは、十
年一日、日常の業務事
でと一二句、先生の
ものを、生きてゐる。そこに詩
句は、聽者の想像
が燃えて来る。例へば十四
の藏者の如き
ひとり寂ひとり寂しく掘路を
翌日はつゝに母うつむかん
淳雲の如き富を つかまえて
男子まことに力ひ寂かく
踏まずすすはるかに年光なるら
百代に生まれん

。ダンスの時の来客十四三十
三日まで五時まで四時半
マロンデレクラムを一ヶ月宛
送ってくれる。
。アメリカは十四十九日に Thomas Cook に登録しに十四三十五日より
働く、
三人の友は Mrs. Gaylord ll
No 1 Wat-ts 2nd St Miami
。朝日さす三月まで霧がはれるあと
また見るぞ。先のオーサム
ゴルフ・ボール
。はるばる山のあなたはうつれて
この夜の底に白き花ある。

[illegible]

[illegible]年三千年前の未[illegible]可憐子を偲
ぶ時に於て、大流領の光が立ち
変じて変ずるものと知る。而して
其の大流領の光が変ずるごとく
空の色、陸の色、海の色までも
が、蒼となり、白となり、ま
た紫となり、黄色となり赤となる。
[illegible]の海、西の日、東の日、[illegible]
[illegible]の光が大流領の
時代に於て[illegible]
[illegible]
[illegible]日は雨
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

て、人事正直の子、エブラハムより
シオンの憤墓を包んだ母
まうた。
化生、今はの七人年に達たる男子、
則ち生徒離の方、すさみ荒んだ
ことは、また言に見ぬ一年がさいる、
歴史的の事実である。
體を體、これは何か其の因
を成しゝみるのであらうか。何時止
むのであらうか。何うすればよいのだら
うか。ということは、老弱男女の影
なし悪ということである。
其の多因に転とは、

日本人の悪癖

日本人を毒はすんはその性を
有毒ものとせる。コンプレックスを
与へる。奴隷さんは頭を垂れ
る。婦人は豆でコウしてはし
ゆんなとしすうならば、
と恐怖に責る。
○それは本人を傷はと言ふ
せざるると呼はれんやうに焼
気を与うと敬ふ。
者ごとフ　せんスペリー
○凡さむし雲雀鳴る野原を
スウィングしては高く空を見る

春

ゴルフ人、春花のうつる廊の野に
三年間、声を耳を玉うつるのみ。
夫、さえずりもせず、
なよなよとあの弾に立つ揮
青葉まひろげて、ゴルフ人、まつ。

春

完全晴れ、青葉のにほひ、重い頃は
手を叩いて、雪春きくもの
あり
○初夏は、まん体は、ちるが抜殻、春
何度毎のリンクに、手を叩かれ。
○雨こぎに、緑りいろ、ますます、ゴリーンに
玉とび、ゴリ、ロビ、落ちく。
○牛小屋の側、ぶきたる、林檎花

すんでゐし

○やまもしく低く鳴くかはづの聲の
下を歩みとおを叩かん。

初夏

○空は晴れ美しき夏の芝生うつくしき
ひすい樹と野に王を叩かん。

夏

○ゆうべすぎ降り続きたる雨あがりて
けふはゆうべごろうろうに

○青空の雲しづまれば木陰より
まだもさびしきうぐいすの
青葉の蔭かな

○ごとく
ところにかしらなき雨の

○雨もまたしずかに降りて
嬉しかりき都の空をいとしと
都の芝野に雨を叩かん。

秋風の吹くに葉ごとを踏みしだく
ゴルフの音ひびかせて
みのりとぶ玉を叩かむ。

すみてまん丸の月の庭に
みのりとぶ玉を叩かむ。

秋

紅葉の錦にうつるフィヤの上、
ふみくまを玉をさがす人すり。

秋

朝日さす三方ます稲の穂のかをり
一ぱい見えるゴルフ先のオーサム

冬

雪とまちとは同じ
隔たる身のまちは青春の広場

雪の野に赤くあたるゴルフ玉
叩くをまつ合もすりけり。

この日はリンゴ園の番
ヨツクの上ハンテンクすり

インドアの稽古すると金は角
座板の上に車を叩かれます。

稽古に練をつけるごとく玉
座板クエルツ叩きまくる。

家庫のラッパの上ビンポンボ
稽古すると夢とくるまで

あの町の花かげ　1932　十二月廿一

。謝石東。強壮。パ易。花。

。遠方の近攻。自己主義ト

。詳議すること。官金私用、

。修正的破棄の。理想に

達しいガナボト・プラクテイカル。現

実不可能。主観とその立

場のみで客観とすりて研究

することを止すし、後に、公正を欲

2。他力来乱、今の福が相積

ところ、露西亜に頼みに来

日に信頼せるかなし。

そうして

○すくとする時代の俗はなく
夢しきりそうこうは未だ
知らぬまに子も東にけるりこうス
高空まは焼ぶ
親は先しむ

○まもきみ三春に芽ちりスマス
ちらり〳〵と眼をまばゆき春
○けふすまた話ふ火もなとはなりて
三春れゆく空の雲を眺みむ

○
○心には男と生れぬ形ばかり
軍執ごとに涙こぼるる

糟糠の妻アダネバ

雲に蔭へ流れへて十七年
ものうこと我も可なり。

○常に事実を心理の上に振る
て率直に書いたと云ふ。
有栖川宮懐旧録と題して、秋々
の心を忘れぬ。回顧録

○窓のそとを眺めれば 玉の庭の
様雪かちらつく降りみる。
庭もした密雲の下には、ポレン
シードみか植しと、濡れ縁にも
いたやうにボンやりして見える。
リバサイ、ドライブの葉の無い
林の中に立つ常盤木だけ
が生々として見る。

Dec 1st 1932

"Wedding Anniversary"

Rain or Shine
We stood together,
Storm or blizzard
We fought together,
For seventeen long years;
For you, Here is a hug!
For you, Here is a kiss!
From Tom for my brave girl.

To my own girl Agnes.
From Tom

觀念

○天に風雲、地に五穀、愛き
たる花は風に隨ひ、秋の江
面は時雨に悩まされ人は
運命に順ふ。やうなへからざる
るは世の中なり。

運命とは何ぞや。盛んなる
者は衰へ、事物もまた枯れ、
會すれば離れる。離れるに定まり
生ずれば必ず死すとは
これ皆運命の支配する所
なり。

さはれ人は金殿玉楼に寢
食し美衣美食を極むるも
運命なり。生活離に苦し
めらるるも亦運命なり。
子は飢に泣き、夫を職を

死をえらぶ。然れども、切腹は武士の
特権にして、之を許さるゝ。況んや
なし。また、死を一死なり
生きて生きながらえ、生きながら
ゆえに世に捨てられたる
恥辱命なり。

。日本は庫金と服従とを
三つの会社の下に分かれ大臣
まをもって配しとする。来日は
は、法令と法律とをもって
そなえ、生民をもって配し
なるべし。

。来日北部の気候の激変
なることと甚し。寒暖は
春の如く晴れ、少しはまた

テピ[illegible]元の日と[illegible]た。[illegible]
銀の[illegible]障すること、[illegible]
時百に四十九[illegible]
因する[illegible]、南[illegible]と
北[illegible]すること。

ごう

たまくに玉の[illegible]は自[illegible]
子も呼けば[illegible]

1932 不幸な風[illegible]
狂人 二十九、二月 十二
中[illegible] 二 児童院 九
刑務所 八
一九十篠[illegible]

12 朱雀の句碑

たしました、またもとしたり、おのへと

こだまこのあが下と二へ

16 〃

猫ひさまどうしたなつかしさ

書画の王は

たびも却

〃 十一番

解るとき、月に向かって歌ひけり

北斗星の、やりはさびしと

霜の日

月磨き鳥鳴いて霜天に満ち

王を叩いて相見る形なり

雪の朝

〃 ヒロシ又喜寿の矢、鐘の初を

13 再建には般へるゴルフ人かな

能に立流すべし。

觀世。宝生。金春

金剛。喜多。

。謡や陽曲を稽古する

。素人達は春流を敬意

を無比に感じてゐる

。一一の唄一の舞曲を作る人陰

に拍子を書く

。春天頂にあることかゝまた

。涙之の涙を感じさせた。

。揺籃の母の想ひ出

後方松元屋の外題元信

時雨雅楽

。馬へ乗り降りやすみ村時雨

空めでたく世の雲のまよひさ。

。車の中の錦はこれなるか

これを車のあゆみとあみん

。よしさらば誠の道にみゆきして

こゝを車のめぐるなよ元

。海えかへり馬をかなし立ちのぼる

夜車の烟の末の白雲

。霜にこち潤ハ土をれなきしの

名残を乗ど雅楽うそ

つゞく

後水尾院と歌しまをよし

○はるなれと後に残る松のみ松哉

何のはて千世の陰を待ちけん

後陽成院　一四二　一年時度

○うき世の色の花と言の葉をなれを

方舟の上に降りとぞ知る

月を老と友とまひめし浮世かな

八月八

桐壷更衣　葉式部

○かぎりとて別るゝ道のあはれさに

いのまほしさは春なりけり

八月三

○宮城野の露あはれ凡の言に

お萩のもとを知ひとをゝれ

○銃声のこゑ一のかぎりを一しきりて
長きく後あかず淋しき夜かな。

○しどけなしと世の人をしげきまに清せば
露かなしうすき雲のうへ人

八月七日

○荒れ果てし夏草しげる陰の松をしまう
ひとりあるうへにしづこころなきー

○三年ぶりにすぼうしもかぶる一つにて
魂のすがたをそこと志ろんム

八月七日　霧雨　三句

三のぶ之宮

○松をかぎりの一ゆめと
見るに涙のとまらざりけり

○榊葉のかくるゝまでに見あくらん
そらは山風いかゝあらん

ハモト

○あすゝきはちあひの山をたちわの
田のすみかと鳴ちやーなん

○つゆ霜の玉にぬきしの花に嬉ら花の
つゆには花の下に散るまし

○つゝとにか誘ひ行きしと秋風に
わが袖そはの濡るかとはぐ

○露しとの波えにし色こゝろるまに
秋しわかれと散りにけるかは

○流れるる涙せきあへぬ花に
うかみと見ゆる人の面のげ

八二

○宮ふく人の秋のもみちば
ひまなくあつるわが涙かな

〃

○神無月雲のはれまにわび人の
神のすぐれはやすぎ立てつゝ

〃 八二三

○あつぶしまうちきこゆれど実まし夜に
苔の下こそ思ひやられる

所

○凡なきに比ひまなくあつる仁葉ばを
秋をかなしむ涙とも知れ。

○いつこにか秋ひゆきしと秋九に
わが妹の下かとはすらや

とはまほしきは秋の下かなと

○凡まきみ秋の林の仁葉ばの
ひまなくあつるわが涙かな

。姉はけふをかぎりの門をと
見れば戻りとまらざりけり。

。三ちの庭の梅の木の花は

冬の書く 882 春子夏雪

。木の露もとの土ぐ山や世々中の
あくれ先きつたあしけうえん。と
遍服僧正のまれしは、げに事
どかし。

。つのはれわかかぎりの道の門あを
見おくるるを先に立つる

。老王にまさる猫をこうしなへば
ちゞのこゑわが仏にかはん

。なき人のはきし太刀とと見る春に
ぬるわたをきゝ心地こそすれ

。わが父はかへらぬ道にゆびぬとも
まゝで見むるを見るかゝ悲しき

。なきし人のわすれかたみの紅葉の
そをたにおふしたてんとも思ふ。

八八六

。みだれあつる涙の玉は紅葉の
そこなるべやしるのなかなしに

。ゆくとゝに情なし春をまつ人
花ハさきほろとちる涙かな

○なき霊のたましひのたゞよふ駅舎に
いそぐ若つばめなのかなしさ。

○ちゝとゝ厨弁を手につたひつゝ
春日にきえぬ霧は何みだか。

○ふと見てよべど居ぬ人の
影さへゆゝしとしし犬のこと。

○ゝろとゝに見し人ことし三かりとて
又ゝ夜跡の鳴かなくに

○ひとゝゆことしはさびし南部
あゝしの杉はなみたれども

ハハセ一

○隣人のかたみと思ふ花さへ
別れて来ぬる春のかなしさ

人なみに育てられしも何事に
成すこともなく老ぬるなさ、
。宿世の定め事には別れるに別れ
会ふ時は逢ふて侍し
春の初の888 香山景樹

。折ちとけて寝たる姿に見ゆれば
春の暮はさぞ過ぎにけん

。いにしへの色も白しに菅原かな
猶さし花はおもひなりけり。

人なる

。主なかりしかは見んとか草ふかく
秋世をだに隔てしもの

○年へたれば花もなほ春ゆゑ人の
涙さへこそ先だたざりけり。

〃

○とゞめえず散りし世の悲しさに
かたみをだにと思ふ春かな。

○旅人のすみかとすれば吳竹の
千年のかげもかひなかりけり。

○雲をかすめ天かけるとも蓮葉の
うへに心はあそびとゞけん

○しめ行れば清水かゝゆゝ人の
露たる我をのこしおくらん。

○この世にとあわぬ枝なのひまとほみ
まゞる面は涙なりけり。

○何にまとたどりもとひぬらん浮雲の
とくきえぬるすゑ世の世なりしを

○とゝにみし影をあらためば大空の
月の鏡ゝかたみなりけり

○あもひき山女なし千鳥かたわれの
月をば見かの上に見んとは

○御伴うえさしとる雲井より
玉のこゑさへひゞくなりかな

○古事の庭の白雪ふみわけて
きのふもけふも見ることゝ

○憂とゝは死はるはかりものと耳きしかど
けふまう見えぬ（ゑ）ぞ思ひます

自作

○その日の涙と凍らんとすれば
空言と知るかなしさと暮すなり。

○見ずさい羽をなかべと知らせ世に
なぜか花身はひらさいすまず。

○朝霧の涙と凍らんその日は
人の言葉と枯れはてけり。

○秋ふかしみぞれまじりの雨雲の
高ら瀬の水さゝなみとけり

○淋しさに都の空をながめれば
あとなつかしの松風の音

博奕喜左衛門の一ひとり娘喜代
喜代が硝子鏡のうた、

○夜ふけ〳〵人の靜の庭歩き
ほゝ笑まりけり月の面影

○悲しみの涙ぬぐひ今すぐ
わかゆく道にえんを見し

世を虚けし家仕と藏を
蔦の街に積直す義侠
ぞ

昭和大東

○女ちの神に祈る秋風の
一面の如くに廣たゝめやう。
金魚
初日の面まゝつるのとけさは
とゝ心地すけり

愛媛病院

○アフリカの南の岸に破船し
助けられし
難船し助けられしはアフリカの
南の濱の惡疫病院

○
きれのパンと一つのボナーとも
感謝ささげて戴きたるし

○
うがたし病院に室多度あり
雨も降ねば燈と共に。

○
まつうと思ひはこゝ少幸ふキーもの
社会とすれば楽な世の中

○
永年の名と誉みはるこの丹には
人 月と二年と枯れはてにけり

○けふまた死にそこなひ苦しむ
弟は、
怒りすさびに書物を投へる。

○重全と遊ぶからこそ腹も立
生れし時のことを考へる。

people have to get back to the simple life."

"It may take a revolution to correct our existing state of disorganization, it may be done by economic planning; it may be done by a dictatorship of wealth, but it will certainly not be done by the attitude of sweet resignation."

"You can get used to anything when you have to, even hanging, ha, ha."

"The he has become a finer person because of adversity. He has cut out all such foolishness as country clubs and shows and concerts and vacation trips. He hasn't much use for these fellows who think that something might be done to fix things up. We have been living in a fool paradise, and wages have to come down, and

W. Shakespeare says

"There is a divinity that shapes
our ends, rough-hew them
though we will."

Moved within a stone's
throw of London

Have been trudging - and
riding when possible - along
muddy roads reached out-
lying suburbs last night.

People were living in
a fool's paradise for last
fifteen years.

"Despite of a week-end buffeting by boisterous gales and almost incessant rains."

"Advance, work, and if and when necessary, fight."

L. of N. especially, now it is extraordinarily sick

"The league is too universal. Its advice loses efficacy with distance. It may have benefitted European regions, but in the far east and South America its words remain words without sense, without significance."

Mussolini. Oct 23 1932

礦金勸誘文

寛政二年壬戌中春